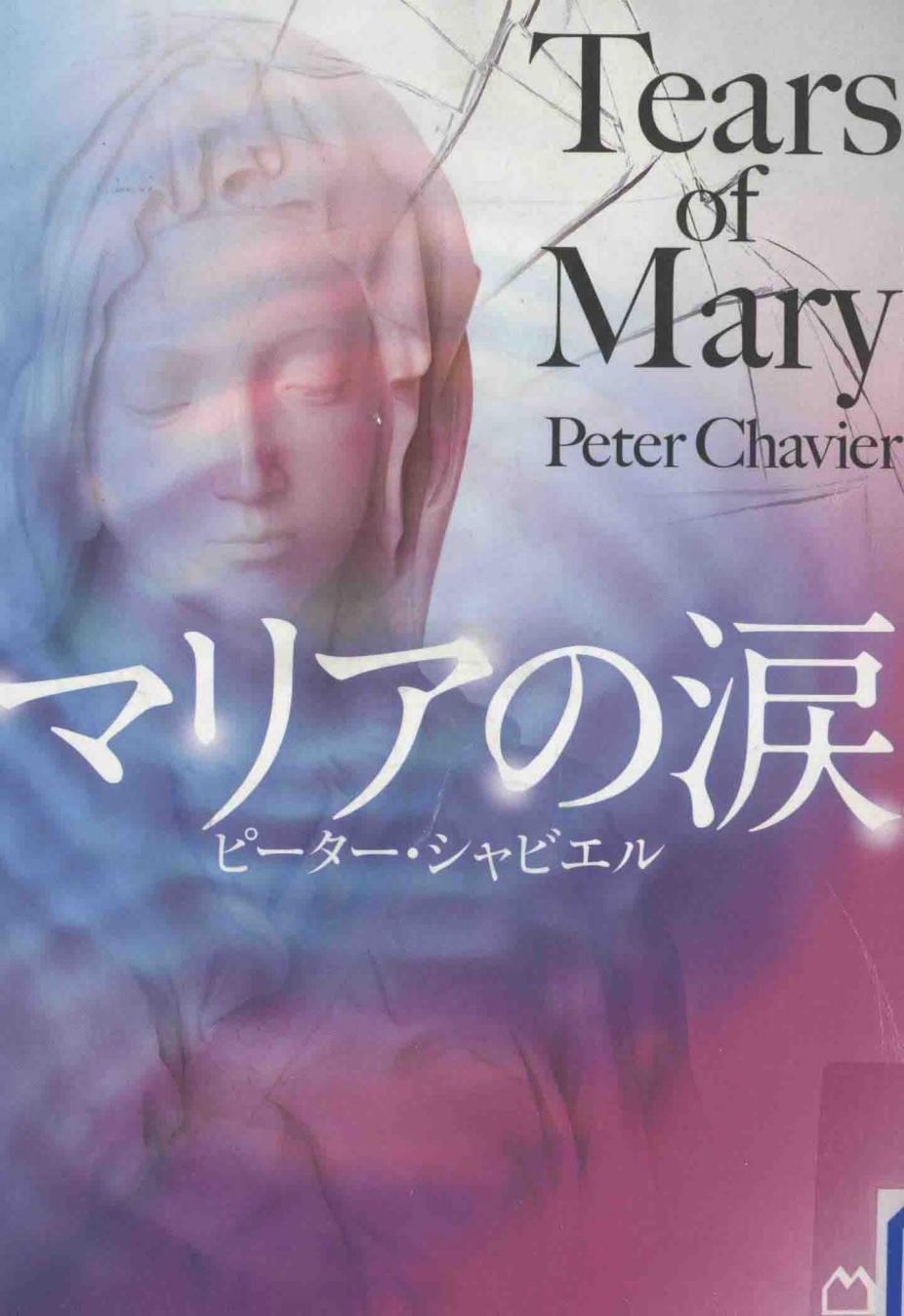




Tears of Mary

Peter Chavier

マリアの涙

ピーター・シャビエル



マリアの涙

ピーター・シャビエル

Tears
of
Mary

Peter Chavie

マガジンハウス

ピーター・シャビエル Peter Chavier

キリスト教の幼児洗礼を受け、カトリックの家庭で育つ。日本とアメリカでプロテスタント・カトリックのほかギリシャ正教・ユダヤ教・イスラム教などについても学ぶ。現在、ドイツに在住し、新聞や雑誌で執筆する傍ら、神学的テーマを小説で表現する試みを続けている。Master of Divinity。著書に『イエスの涙』(アートヴィレッジ)がある。

マリアの涙

2010年12月16日 第1刷発行

著者 ピーター・シャビエル
発行者 石崎 孟
発行所 株式会社マガジンハウス
〒104-8003 東京都中央区銀座3-13-10
受注センター ☎ 049-275-1811
書籍編集部 ☎ 03-3545-7030

印刷+製本所 大日本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

©2010 Peter Chavier. Printed in Japan
ISBN978-4-8387-2215-0 C0093

乱丁本、落丁本は小社製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。

マガジンハウスのホームページ

<http://magazineworld.jp/>

マリアの涙

装丁 片岡忠彦

カバー写真 Photo by Pieta (marble) (detail), Buonarroti, Michelangelo (1475-1564)
/ St. Peter's, Vatican, Rome, Italy / The Bridgeman Art Library / Uniphoto Press

目次

Tears of Mary, Contents

八章	泣き続けるマリア	175
七章	惹かれ合う心	158
六章	もう一つの絶望	136
五章	喪失	96
四章	虐められるマリア	82
三章	顔のないピエタ	48
二章	傷つけられたマリア	38
一章	悲しみの聖母	16
プロローグ		8

九章 ピエタ破壊犯 189

十章 贈り物 214

十一章 ピエタ破壊の真相 239

十二章 取り返しのつかない罪 257

十三章 「本当のマリア」を求めて 274

十四章 マリアの心 303

十五章 もう一つのスターバト・マーテル 337

エピローグ 388

「(二十節) イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。(二十一節) 身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに來た。『あの男は氣が変になっている』と言われていたからである」

『マルコによる福音書』第三章二十一—二十一節より

プロローグ

秋ももうそろそろ終わろうとするある日の夕暮れどき、藤原道生は高校からの帰り道を重い足取りで歩いていった。

彼の父親はしばしば二日酔いで仕事を休み、昼過ぎに起き出しては迎え酒だと言ってまた飲んで、妻に頻繁に暴力をふるうので、家庭には争いが絶えなかった。

父親はもともと暴力をふるうような人間ではなかったが、道生の四歳年下の妹を三年前に病気で亡くしてから性格が変わってしまった。彼は妻が娘の異常にもっと早くに気づいて病院へ連れて行っていれば、娘は死なずにすんだのではないかと責めるようになったのだ。

追い打ちをかけるように、作業中に利き手の親指と人差し指に深刻な怪我をする事故に見まわれた。彼は優秀な腕を持つ宮大工で、棟梁や仕事仲間からも信頼されていたが、思うように動かない手でそれまでのように満足のいく仕事することは難しかった。娘を失った悲しみから立ち直れないまま仕事にも自信を失って働く意欲をなくし、浴びるように酒を飲むようになった。酒の量と比例して暴力は激しさを増し、家庭は加速度的に崩壊していった。

道生はそのような状況の中で勉強にも身が入らず、生きる希望も失いかけていた。

その日も家に帰りたくないという気持ちで道生にのしかかっている、学校が終わってから、家とは反対の方向にあてもなく歩いて行つた。今まで通つたことのない道を歩いていると、右手にキリスト教の教会らしい建物があり、その前には女性の像が立っていた。

道生の家は浄土真宗だったので、キリスト教とはほとんど縁がなく、それが聖母マリアの像であることも知らなかった。しかし、彼にはそんなことはどうでもよかった。その女性が優しく自分を見つめてくれているような気がして心が慰められただけで十分だったのだ。

女性の顔は、少し愁いを含んでいるように見え、それがかえって、道生に親近感を抱かせたのかもしれない。なぜか彼女が、彼の悲しみや苦しみを分かってくれるような気がしたのだ。それ以来彼は、よくその道を通つて、ずいぶん回り道をしてから、家に帰るようになった。

道生が初めてその女性の像を見てから一ヶ月ほどたった、クリスマスも近い雪の降る日のこと。朝出かける前に両親が言い争いをしていた場面が思い出され、道生の心はいつも増してすさんでいた。雪が積もり始めたうす暗い道を歩いていると、余計に気持ちが滅入り、足取りが鈍った。

(帰りたくない)

そう心の中でつぶやいたとき、ふと気がつくと、ちょうどあの教会が目に入った。われ知らず歩を速めて近づくと、雪に霞む夕闇の中に、あの女性の像が白い帽子をかぶって立っていた。その顔は、いつものように優しく、そして悲しい目をして彼を見つめていた。教会の前にはクリスマスツリーの明かりが灯り、時折、中から楽しそうな笑い声がもれ聞こえてきた。

(この前笑つたのは、一体いつだっただろう?)

笑い声に包まれたその雰囲気は、すさんだ彼の心とはあまりにも不釣り合いな気がして悲しかった。急にそこにいる自分がひどく場違いに感じられていたたまれなくなり、家に帰りたくはなかったが仕方なく重い足を引きずってその場を立ち去ろうとした。

帰り際にもう一度女性の顔を見上げると、ふと彼女が寒さに凍えて震えているような気がした。可哀そうに思った道生は自分のはめていた手袋を脱いで、その細い指の手にはめてやった。

するとそのとき、何かが雪の中に落ちて光った。

しゃがんで拾ってみると、それは、縦三センチ、横二センチほどの卵型をした、小さな銀製のメダルのようなものであった。

道生は、それをクリスマスツリーに点滅している明かりにかざしてみた。かなり古そうで少し黒ずんでいた。片面には、十字架とアルファベットの文字のようなものが、もう一方の面には、長いショールのようなものを肩から羽織った女性の全身像が刻まれていた。その像は、今日の前にある女性の像とよく似ていた。

小さいメダルなので、顔の表情はそれほどはっきりとはしていない。

そのメダルがどこから落ちてきたのか彼には分からなかったが、それとなく女性の顔を見上げると、一瞬その女性が心なしか微笑んだようだった。

(もしかしたら、手袋のお札にくれたのかな?)

現実にはありそうもないことであったが、そう思うと嬉しくなり、思わずそのメダルを握りしめた。そのときであった。

「入っているのよ」

そう彼に語りかけるかすかな声が聞こえたような気がしたのだ。周りを見回しても女性の像と道生のほかには誰もいなかった。とても奇妙な感覚だった。

彼にとっては、女性の像が「入っていいのよ」とささやくなどということは、理性では信じがたいことであつた。だが透明な優しい声は、あまりにもはっきりと耳に残っていた。

そして不思議なことであるが、彼の心はその声に従うことを受け入れていた。彼は、おそろおそろ教会の中に入っていた。

扉を開くと、五十代半ばに見える男性を開んで、十人ぐらいの人たちが何かの本を読んでいた。皆は朗読を中断して道生のほうを向き、嫌な顔もせず彼を温かく迎え入れてくれた。

「こんばんは。藤原道生といます。高校一年生です」

道生は決して華奢な体つきではなく、どちらかといえば、上背もあり、がっしりしていた。太い眉と通った鼻筋、彫りの深い顔立ちである。だが緊張していたため、そんな彼の外見からは想像できないほどか細い声で、そう言った。

「こんばんは。よくいらつしやいました。後藤です。この教会の神父です」

壮年の男性が応じた。

「突然お邪魔してすみません。教会の前にある女性の像を見てはいつも慰められていたので、一度中に入ってお礼を言いたくて」

「教会の前の女性の像……ですか？」

後藤神父が怪訝そうにつぶやいた。

「私たちの教会の前には、女性の像なんかないですよ。男性の像ならありますけどね」

学生らしい女性の言葉に、皆が笑った。

「いえ、そんなはずはありません。僕は何度もその女性の優しい顔を見てきたのですから。間違ひありません」

道生は笑われて、自尊心が傷つき、顔を赤らめながらむきになって言い返した。

「そんなに気になるのでしたら、一緒に確かめに行きましようか？」

神父が穏やかな声で誘った。

「ええ、是非お願いします」

他の信徒たちも神父と道生の後にぞろぞろとついていった。外は雪がまだ降り続いていた。教会の入口近くまで来て、道生はショックで呆然と立ち尽くすしかなかった。

そこにはつい先ほど、彼が手袋をはめてやり、彼に優しく微笑みかけたあの女性の像はなく、女性の像が立っていた場所には、神父たちが言っていたように、両手を広げた男性の像だけが立っていた。

「そんな馬鹿な……。確かにここに女性の像があったんです！　そしていつも僕を優しいまなざしで見つめてくれていたんです。僕はそれによつてどれだけ心が慰められ、励まされたかしのないんです。あれは絶対夢でも幻でもありません。僕の心が温かいものを実際に感じたのですから。嘘じゃないんです！」

道生は、自分自身でも何が起こっているのか分からず混乱していたが、自分が嘘つきだと思われるのが耐えられず、泣き出しそうな顔をして必死に真実だと訴えようとした。

「その女性は、僕にこんなものをくれたんです」

彼はとっさに先ほどのメダルのことを思い出し、ずっと握り続けていた右手を開いて、それを見せた。すると、その場の雰囲気^が急に張り詰め、静まりかえった。

「無原罪のマリア様の不思議のメダイ！」

さっきの女子学生が驚いて叫んだ。

「無原罪のマリア？　不思議のメダイ？」

道生は、何のことか分からず、女子学生の言葉をただ繰り返した。

「このメダルは、不思議のメダイというんです。一八三〇年に、無原罪のマリア様が、聖カタリナ・ラブレというフランスの修道女に現れて、作るようにと言われたものなんです。それを身に着け、『原罪なくして宿り給いし聖マリア、御身に依り頼み奉る我等の為に祈り給え』と祈っていると、マリア様が私たちを守り、多くの恵みを与えて下さるのです。マリア様からの私たちへの贈り物なのです」

後藤神父はそう説明してから、気落ちして、動揺している道生の肩に優しく手を置いた。

「私はあなたが嘘をついているなどとは思っていないので安心してください。……体が冷えているでしょう。よかったら中に入ってお茶でもどうですか？」

道生は、後藤神父が続けて語った言葉にさらに驚かされた。

（こういう状況なら、嘘つき呼ばわりされても仕方がないのに）

予想に反して、誰も彼を馬鹿にしているようには見えなかった。むしろ彼らの目は、何か素晴らしいものを見ているかのように輝いていた。

「もしかしたら、あなたが見たのは本当に女性の像だったのかもしれない。そういうことはあり

得ると私は信じます」

その言葉に、道生は、神父が彼の言ったことを本気で信じてくれていると感じて、落ち着きを取り戻し、促されるままに中に入ってしまった。

「今日の聖書研究はここまでにして、お茶にしましょう！　マリア様が、特別な方を送って下さったことでもありますし」

道生が見た女性がイエス・キリストの母、聖母マリアだということを彼はそのとき初めて知った。「そうしましょう！」

神父の提案に、何人かが元氣な明るい声で答えた。道生が驚き、また同時に嬉しかったのは、後藤神父だけではなく、教会にいる人たちはどうも道生のことを嘘つきとは思っていないらしいことだった。

道生は、なぜ自分がこの教会の前の道を歩くようになったのか、どのようにして聖母マリアの像に慰められてきたのか、どうして教会に入ろうと思ったのかを知らず知らずのうちに話していた。そして、皆は彼の語る言葉に熱心に耳を傾けて聴いてくれた。そのひとときは、彼には生涯忘れることができない尊い時間となったのであった。

皆に別れの挨拶をして教会を出てから、道生はもう一度あの女性の像を見たところに行ってみた。そこにはやはり聖母マリアの像はなく、イエス・キリストの像が両手を広げて立っているだけだった。

だが彼の心は、先ほどのようにもはや混乱してはおらず穏やかだった。そして、あの空虚で重苦